



NAMIE
町民
インタビュー

01

今までは守っているつもりでしたが、いつもお互いが支え合っていることに気づかされました

志賀 隆充さん

震災前の居住地：大堀地区

現在住んでいるところ：福島県

取材：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山・阿部／「平成24年7月広報なみえ掲載」

昨年3月11日、東日本大震災が発生したときには、富岡消防署での勤務中だったそうです。

大堀とともに暮らしていた隆充さんのご両親と子どもたちの4人は、翌朝すぐに本宮市の親戚を頼って避難しました。一方、南相馬市で看護師をしていた奥さんは翌日も勤務だったため、実家の両親とともに避難所で一夜を明かし、子どもたちや家族とは13日に本宮の避難先で合流しました。

隆充さんが再び家族に会えたのは19日、8日ぶりでした。現在は、ご両親とは別に親子4人で暮らし、1時間以上をかけて現在の勤務先である楢葉分署に通っていらっしゃいます。

自分の家族を探す想いを仕事に重ねました

大地震と津波発生当時、勤務していた富岡消防署は停電となり、119番通報も受信できない状態でしたから、署内に指揮本部を立ち上げ、救助活動をしていました。11日からの約1週間、たぶん1時間くらいしか眠っていなかったと思います。

翌日12日の明け方からは原発事故や注水に伴うトラブルが相次ぎ、避難誘導の広報活動も行いながら、一人暮らしや寝たきりの方々の搬送なども救急車以外の車も使って対応しました。

ともかく、地域の消防団の方々も原発から避難され、消防と東京電力の関係者しかいなかったわけですから、我々がここを守るという想いで、本当に一致団結していたなあと後からつくづく思いました。

災害発生から1週間後、交代で休みを取ることにになり、富岡町を出て携帯電話の通じる都路村でふと携帯を見ました。すると、家族はもちろん、大学時代の友人や消防学校の同期生、日ごろお付き合いのある方々など、大切に想っている人たちから不在着信や留守電、メールが数え切れないほど入っていました。

「空メールでもいいから返事を」というものもあって、運転できないほどに涙があふれました。

落ち着いてからですが、子どもたちのリフレッシュのために東京や富山、新潟などへ出かけましたが、訪れる先で触れ合う人たちが本当に優しく、人は人に支えられているのだとつくづく感じました。

父の早い判断が、家族を守ってくれたと思います

大堀相馬焼の窯元をしていた父が、母と子どもたちを連れて12日の1号機爆発の直後に、本宮の親戚を頼って移動してくれました。この判断がなければ、食事も満足になく、厳しい寒さの中、避難所で過ごすならなかつたでしょう。

また、ボランティア活動を希望した父が避難先である本宮



市役所に問い合わせに行ったことが縁で、今の借上げ住宅に入居できました。私たちも一時、同じ住宅に住みましたが、水回りが不便なため転居しました。子どもたちの学校環境を変えずにすむのならば、一軒家を借りて再び6人家族で暮らしたいのですが、なかなか適当な住まいが見つかりません。

浪江には帰りたい。でも帰れないかもしれないという想いの狭間で心が揺らぎます。特に子どもたちから「いつ帰れる？」と聞かれるとなおさらです。私は、長い時間がかかって、大堀で前と同じような暮らしに戻りたいと願っています。

家族の理解があってこそその仕事だと痛感

現在は浪江消防署に勤務し、本宮市から1時間半掛けて通勤。職場が離れているだけに地震があると家族が心配になりますね。故郷を守るためとはいえ、家族の理解があってこそ仕事が続けられていると感謝しています。町内には車の往来も増え、復興の進捗が実感できるようになりました。1日も早く町内に戻りたいと考えています。

(平成29年3月2日追加取材)



NAMIE
町民
インタビュー

02

なみえ焼そばで 復興の手助けを

八島 貞之さん

震災前の居住地：酒田地区

現在住んでいるところ：福島県

取材：元気玉プロジェクト実行委員会鈴木／「平成23年7月広報なみえ掲載」

子どもたちとの生活

現在は、義務教育中の子どものいる世帯専用の二次避難所で生活しています。それまでは、私の両親も一緒に生活していたのですが、子どもの祖父母は入居対象ではないとのことから、両親とは別のところで暮らしています。本当は孫の成長を身近に感じてもらいながら暮らしてほしいのですが、できないのが忍びないです。

二次避難生活は、一世帯一部屋で生活しているので、子どもが午後9時に寝た後など部屋で仕事ができないのが不便です。



浪江町民をつなげる浪江の焼きそば

商工会の青年部長時代から、なみえ焼そばで町おこしをする取り組みを行っていました。もともとこの焼きそばは50数年前に、その当時、地域が貧しくて漁業も農業も重労働で大変だった時代、安く食べ応えがあるものでみんなを元気にしたいという気持ちで、ある食堂が考案したそうです。

今、町が大変な状況ですが、当時の思いと同じくなみえ焼そばで復興を手助けできたらと思っています。本来私たち青年部は、先頭に立って復興のお手伝いをしたいのですが、町が立ち入り禁止のために、何もできないのが悔しいです。唯一できることは、浪江町の町おこしを続けていくことだと思っています。それをやっていけば、心の復興につながっていくのではないかと決めました。

4月29日～5月8日、安達ヶ原ふるさと村でなみえ焼そばを5000食ぐらい出しました。浪江の人たちが集まって長い時間並んで待ってくれて、暖かい言葉もかけていただきました。

「みんな頑張ってるから、懐かしい焼きそばを食べにきたよ。」

「頑張れよ～！」などみんなに元気を届けるつもりが、逆に元気をいただいたと思います。

今後も、まだまだ食べれない人も多いので、焼そばを出す機会ができたかと考えています。売上は義援金などにしたいし、町民が集まれる場を作っていきたいです。

町に帰ったら

自分の仕事である建築業で町の復興を手助けしたい。そのためにも、浪江の中小企業の今後の補償をいち早くしてほし

い。浪江には中小企業が多いので、そのことが無いと、町に戻ったときに事業が再開できなくなることが心配です。

青年部の仲間たちと

今会いたいのは、ともに町おこしのために汗を流した商工会の青年部の仲間です。町おこしをしながら友情や信頼関係を深めていきました。それはお金には変えられないものです。

町民の皆さんや仲間と1人も欠けることなく、みんなで町に戻って力を合わせて復興に取り組みたいと思います。

鉄工所経営に苦戦して新事業開始

二本松市から新地町に移り、平成24年に南相馬市へ。経営する鉄工所もここに移しました。震災後は本業が厳しくなったため、新事業で何とか従業員を増員。復興に携わりながら雇用を守り、地域貢献できればと考えています。なみえ焼そばにも関わってきましたが、いまは仕事の基盤づくりのため世代交代を促している最中です。

(平成29年3月3日追加取材)



NAMIE
町民

インタビュー

03-1

浪江小の校歌を忘れたくない

長竹 麻弘くん

震災前の居住地：川添地区

現在住んでいるところ：群馬県

取材：高崎経済大学 櫻井常矢研究室 櫻井・山下

「平成23年7月広報なみえ掲載」

僕は、震災後3日目に親戚のいる群馬県伊勢崎市に避難してきました。それからは、おじいちゃん、おばあちゃんも一緒にずっとこのまちに住んでいます。

今、通っている小学校に福島県から避難してきた人は僕ひとり。だけど、新しい友だちがたくさんできました。「マヒロ！」と友だちが僕の家までいつも誘いにきてくれます。休みの日は朝から夕方までずっと楽しく遊んでいます。6月5日から横浜や鎌倉への修学旅行も始まります。

この前、関東に避難している浪江町の友だちと東京・上野で会いました。懐かしかったし、できたらもっとたくさんの浪江の友だちと会いたいです。

みんなはどこにいるのかな。

担任の井戸川先生にも会いたいな。

こっちの小学校の校歌を歌うたびに、なんだか浪江小の校歌を忘れてしまう気がして、一度お母さんと大きな声で浪江小の校歌を自分の家で歌ったりもしました。以前のように浪江の中央公園で野球をしたり、剣道や習字を習ったり、サンブラザに買い物に行ったり、浪江町に帰って普通の生活がし



たいです。

それまで家族と一緒に助け合っていきたいです。来月から、僕が得意な習字の教室に通って元気に頑張っていきます。



NAMIE
町民

インタビュー

03-2

失ったものよりも得たものの方が多いと信じたい

—幼いころからの夢に向かってこれからも頑張っていく—

今は中学校の剣道部に所属して、毎日朝早くから夕方遅くまで、そして土日にも練習に頑張っています。群馬の夏は暑いので大変ですが、レギュラーを目指しています。同じく浪江

の頃から続けている習字も7段になり、群馬県のペン書道展では2年連続優秀賞を取りました。そして高校受験も近づいてきています。僕は鉄道関係を専門とする運輸科のある東京

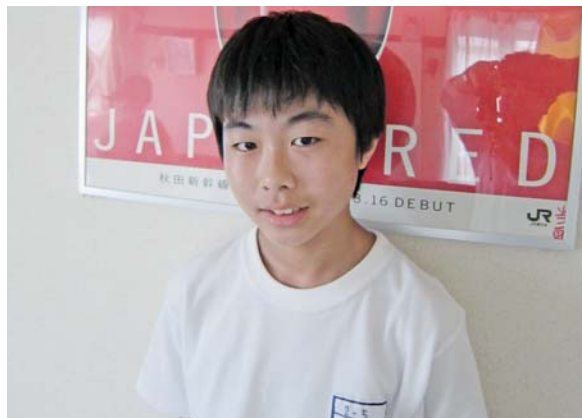
の高校に進学したいと思っています。これは浪江の保育園の頃からの夢だったし、今も変わっていません。

去年の2月にあった猪苗代での浪江小の卒業式以来、もう浪江の友達には会っていませんでしたが、今年の6月、浪江小の時のランドセルが送られてきました。その中には請戸川のゴミ拾いをした時の作文がそのまま入っていました。あの頃をととても懐かしく思い出すことができて本当にうれしかったです！

群馬では、福島のことをニュースなどで伝えることが少ないし、ふだんの家族の会話の中からも少しずつ福島話題が減ってしまうのですが、たまに福島や浪江のことがテレビに映ると、やっぱり浪江に帰りたいという想いが心のなかで高まってきます。

でも犬の散歩でお母さんが近所の人と立ち話をしていたり、僕も全国一斉テストで自分の学校名を県名から記入したりすると、自分が群馬に暮らしていること、そしてここの生活に慣れてきていることを改めて感じます。

大震災によって、浪江町を離れることになったり、友達にも会えなくなったり、失ったものがたくさんありました。だけど一生懸命頑張っている今の自分があるのは、震災からの色々な経験があったからこそだと思います。お母さんも今年



から介護の仕事に毎日頑張っています。毎日忙しくしているお母さんを見てると安心します。これからもそんなお母さんと支えあって、頑張り合って、自分の目標に向かって進んでいきます。

憧れだった鉄道の仕事に就くため努力

いまは鉄道関係の学科がある東京の高校に通っています。伊勢崎市から通うには2時間半ほどかかりますが、浪江町にいたころから憧れていた鉄道の仕事に就くためがんばっています。いま振り返ってみると、憧れの原点は常磐線でしたね。卒業後は私鉄の駅員になるのが目標。ゆくゆくは車掌か運転士になりたいと考えています。

(平成29年3月3日追加取材)



NAMIE
町民

インタビュー

04

前に進む決心

中西總一郎さん

震災前の居住地：田尻地区

現在住んでいるところ：山形県

取材：(特活) きらりよしじまネットワーク小形・原田

「平成23年7月広報なみえ掲載」

震災数日前に生まれた孫を連れて山形県南陽市に避難されている中西さんご一家。被災していながらも、一刻も早く仕事を通して、復興の手伝いしたいと願う。「阪神大震災は他人事」だったという中西さん。生まれたばかりの孫に浪江町の美しい風景を早く見せたいという。

震災翌日の3月12日に福島原発事故による避難指示により、山形市内の知人アパートに家族5人で避難してきました。その後、南陽市にあるアメリカンビレッジ（トレーラーハウス）を知り移動、長期間の避難に備えました。孫は、震災数日前に生まれたばかりで、病院から原発からすぐ離れるようにとの指導があり退院してすぐ山形に避難してきました。滞在中、南陽市で赤湯温泉 桜湯さんで大浴場を避難者に開放していることを聞き立ち寄った際、桜湯の女将さんが「赤ちゃんがいてトレーラーハウスは大変でしょう」とのこと南陽市役所に問い合わせしてくださり、避難所として桜湯に滞在できることとなりました。女将さんのお父さんが浪江町出身であったこと、孫の名前が「桜子」という縁があったのかもしれません。深く感謝しています。

震災では、義理の母と兄が津波の犠牲となりました。兄の確認はまだ取れませんが、母はDNA鑑定で本人確認ができ、葬式をすることができました。母が見つかったことを区切りとして、前に進む決心をし、それまで経営してきた会社を福島県二本松に仮社屋を置き、再建に向けて取り掛かっている状況です。

地震直後から近所の人や消防などみんなで不明者の搜索活動をしていましたが、12日に避難指示が出され、仕方なく搜索活動を止め避難してきました。もう少し搜索していたら、もしかしたら助かった命があったかもしれないということが心残りではありません。原子力被害がなければ搜索もできたし、避難する必要もなかった。これが原子力被害の恐ろしさであ



り、ひどいところです。二度とあってはならない事故だと思います。

今思えば阪神大震災は、もしかしたら「他人事」だったのかもしれないという思いがあります。今回の震災を経験して、人と人との助け合いの心の必要性を強く感じました。じっとしてはならない、動かなければダメ。一日も早く復興して、思返しがしたいと思っています。

私にとって浪江町はかけがえのない故郷です。海、山があり、海産物もおいしいし、山菜もおいしいところです。B-1グルメでも有名になったなみえ焼きそばもおいしいのです。一刻も早く、元の浪江町の姿に戻しましょう。

震災直前に生まれた孫がすくすく成長

平成23年7月、経営していた測量設計会社を二本松市で再開。これからも社業を通し、浪江町の復興に役立てるよう社員とともに邁進していきます。いまは家内と2人暮らし。娘と孫は一時長野県東御市に移り、いまは嫁ぎ先のいわき市に戻りました。避難時はどうなることかと心配しましたが、孫娘もすくすくと成長していますよ。

(平成29年3月3日追加取材)



NAMIE
町民

インタビュー

05

請戸の海の朝日が見たい

五十嵐英明さん

震災前の居住地：請戸地区

現在住んでいるところ：茨城県

取材：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井・山本・亀井

「平成23年8月広報なみえ掲載」

震災後、請戸の自宅で津波に流された五十嵐さんは、レスキュー隊に助けられた。避難先を転々としながら家族と合流し、茨城県古河市の病院に勤める娘さんを頼って現在のアパートで二人のお孫さんと家族6人で生活している。

地震のあと津波に流されたが、レスキュー隊に助けられ難を逃れた。寒い暗闇の中で助けを求めている人が大勢いたはずだ。仲間やその家族には亡くなった方が多く、思い出すたびに心が痛む。私は15歳のときから漁業一筋だったので、やっぱり船で、漁に出ての仕事がしたい。運転手の仕事や農業などの誘いもあるが戸惑っている。でも、家の中にじっとしているだけでは自分もつらいし、家族にも心配をかけてしまう。これから先どうしたらいいのか。何か海の仕事を見つけないかと思い、新潟にでも行ってみるかと言と妻と話だけはしている。ただ、日本海の夕日もきれいだろうけど、やっぱり請戸の海の朝日が見てみたい。内陸で生活していると新鮮な魚料理が食べたくなるね。浪江ではあたり前の暮らしが、どんなに贅沢なものであったのかと思う。漁師仲間の家族と年に一度の旅行に行っていたことがなつかしい。またそんな普通の暮らしに戻りたい。

浪江町の多くの住民を集めて、今後についての話し合いの場をもつべきと思う。特に漁師は組合などが町単位ではないため、役場の役割が大きいと思っている。



知人との電話がいい気晴らしに

南相馬市に住んだ後、平成28年に茨城県北茨城市に引っ越しました。娘や孫たちが関西に移ったため、いまは妻と2人で暮らしています。会えるのは年に1回ほどですが、やはりうれしいものですね。いまでも続けている漁師仲間との集まりのほか、浪江町のころからの知人と電話で話したりすることがいい気晴らしになっています。

(平成29年3月3日追加取材)



NAMIE
町民
インタビュー

06

地に足つけて、 心をひとつに前へ進みましょう

八幡喜美男さん・万里子さん

震災前の居住地：室原地区

現在住んでいるところ：沖縄県

取材：NPO法人まちなか研究所わくわく 宮道・下地／「平成23年9月広報なみえ掲載」

権現堂字蛭子町では、地元で取れる魚をメイン料理とした居酒屋「北のだいどころ」を経営。お店の仕込み中に震災にあった。3月12日には、親戚を頼り埼玉県へ避難。その後、娘夫婦とともに沖縄へ渡り、現在は沖縄県糸満市で夫婦二人で生活をしている。

避難先沖縄での忘れられない朝ごはん

3月末に、娘夫婦と沖縄に避難した。だけど、沖縄に親戚や友人がいるわけでもなく、どこに行ったらいいのかわからなかった。情報を求めて県庁に行ったとき、那覇市の赤嶺団地自治会長さんと出会い、すごく親切にもらった。次の日から団地に入ることができ、孫の小学校の手続きから掃除や畳、布団、食べ物の準備まで、PTAや婦人会、同じ団地の方々にやっていただき本当によくしてもらった。お隣の方が「これ作ったから食べてー」と、朝ごはんにたくさんのおにぎりとスパムと卵焼きを持ってきてくれたときは、本当にうれしくて涙が出たよ。一生忘れられない。



琉球かすりとの出会い

知らない土地で何もしなかったら気持ちも暗くなるけど、私（万里子さん）は「琉球かすり」という織り物と素晴らしい出会いをした。初めてかすりに触れたとき「すごいなー、いいなー。織ってみたい！」と思っていたら、縁あって織りをさせてもらえることになった。おもいきり糸に触らせてもらって、教えてもらって、毎日がわくわくドキドキ。これから反物も織らせていただけるので、今は、織りをまっとうしたいという目標がある。

育ててもらった浪江町

浪江町は、山の物も海の物もおいしい食道楽のまち。魚は、ヒラメ、オコゼ、カワハギ、フグ、タイ、カレイなどが豊富にとれる。浪江町で居酒屋をやっていたときは、魚の料理がメインだった。オコゼやカワハギ、生ダコの薄造りとかね。ビールと一緒に出していたんだよ。うちのビールはおいしいってお客さんにも言ってもらって…懐かしくて涙が出そう。浪江町は、一生懸命やる人をすごく応援してくれる情の厚いまちで、30年住んでいた私たちは本当に浪江町に育ててもらった。何度、浪江のみなさんに助けてもらったかわからない。浪江町に骨をうずめるつもりでいたのに、まさか沖縄に避難する日がくるなんて思いもしなかった。これから先、どうなるかわからないけど、地に足をつけないと何もできない。沖

縄に渡った今は、沖縄の地に足つけて生きてくしかないよね。

心を強く、前へ

全国に避難している人みんな、さみしい気持ちでいると思う。自分が悪いわけでもない、目に見えない相手と自然災害にやられている。心を折られないように、心を強くひとつにして前に進んでいきましょう。

北茨城市に移るも琉球かすりを継続

いまは平穏無事に暮らしています。糸満市や那覇市で暮らした後、ただただ「帰りたい」との思いから、平成28年夏に茨城県北茨城市へと移って来ました。ここでも琉球かすりを織り続けています（万里子さん）。庭仕事や機織りの手伝いをして過ごしています。地元に近いだけに食べ物が美味しく感じられますね（喜美男さん）。

（平成29年3月2日追加取材）



NAMIE
町民
インタビュー

07

いわき市に住居物件を 探しています

松本 静枝さん

震災前の居住地：川添地区

現在住んでいるところ：宮城県

取材：地域社会デザイン・ラボ 遠藤／「平成24年8月広報なみえ掲載」

昨年3月末に仙台市に避難された松本さん。現在は、仙台市太田区で夫の繁夫さんと2人でアパートに暮らしています。近くに住む娘さん家族と行き来しながら、日々の生活を歩んでいます。

ようやく落ち着き始めた日々

浪江町川添中上ノ原地区に住んでいて、地区内では近所づきあいを日々させていただいていました。老人会の活動やゲートボール、お茶飲み会、自治会活動など、地域の人々との楽しみがたくさんありましたよ。夫も畑仕事やシルバー人材センターの仕事で日々充実していました。でも今は、仙台暮らし。知らない人ばかりですし、道路や場所もよくわからず迷ってばかりです。先日は住まいの近くの駐車場でいわきナンバーの車を見つけました。「どんな方が車乗っているのかな…」なんて考えたり…。こんなことがある度に、浪江での暮らしを懐かしく思い出します。

震災後とはいうと、直後の3月中旬には富岡町に住んでいた私の母が亡くなりました。避難しながら葬儀や供養、相続などの手続きはとても大変で約8ヵ月ほどかかりました。この間は体力が無くなり、じんましんが出たりして気が滅入る日々でした。その後は、夫の病気が検査で分かり5月に入院。2週間弱で退院し、現在では元の調子を取り戻しつつあります。そんな感じでようやく落ち着きはじめたところです。

桑折町の仮設住宅の友人を訪ねて

避難先では、友人や知人と話す機会がなかなか無いので、先日、浪江町の方が多く避難している桑折町の仮設住宅に行ってきました。10人くらいの方が集まってくださり、思い出話やこれからのことについて語り合いました。避難したときには、間もなくか3年くらいしたら浪江に戻れると思っていましたが、今は先の見通しが立ちません。仮設に住む知人たちがこの先のことを心配しています。そう考えると住民が考えて自ら行動を起こすことも大事だね、と話してきました。

今後について夫婦で相談

夫婦で相談したのですが、今後はいわき市に住みたいと考えています。その準備のために、先日現地に行ってきました。そして、地域の不動産会社に希望の物件の空きが見つかったら連絡をもらえるようお願いしてきました。いわき市の物件は空きがなかなか出ない、と言われています。ですが、成



るべく暖かいところ、そして知人や親せきが住んでいる場所で暮らしたいと考えています。今までは、娘夫婦、息子夫婦の近くに住み互いに行き来し助け合ってきましたが、今後は夫婦2人で暮らしていくことにしました。

暖かくて過ごしやすいいわき市に転居

平成24年8月にいわき市へと移りました。気候が浪江町に近いので、暖かくて過ごしやすいですね。いま思えば仙台市は寒さが厳しかったです。月に1回ほど浪江町や双葉町の方たちと会っていますが、その際にたくさんの元気をもらっています。たまに娘が会いに来てくれますが、やっぱり家族の顔を見るのはうれしいものです。

(平成29年3月3日追加取材)



NAMIE
町民
インタビュー

08

「ありがとう高島」^{たかはた} 僕たちは、 前を向いて進む

松崎 光平さん・小桧山 司さん

震災前の居住地：権現堂地区・田尻地区

現在住んでいるところ：宮城県・福島県

取材：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山・NPO法人ビーンズふくしま 中鉢

「平成24年2月広報なみえ掲載」

松崎さんの避難先だった山形県東置賜郡高島町で行われた昨年秋の第47回総合体育祭・ソフトボール大会に浪江町チームとして出場し、見事、準優勝。

散り散りとなって避難生活を送る浪江の仲間たちとともに、再びスポーツができた幸せを噛みしめると同時に、「仲間との再会と高島町との交流の場、時間を与えてくださった町に、心からお礼が言いたい。」と開口一番、話してくださいました。そして、「チームとして記事になったこの『浪江のこころ通信』を、お世話になった高島町のみなさんに届けに行きたい。」とのことでした。

まず、代表である松崎光平さんにお聞きしました

チーム名である『浪江大吉SSB』は、高島町の大会に出場するために結成した合同チームの名前ですが、「大吉」には訳があります。昨年10月2日に行われた体育祭に出場するきっかけを作ってくださったのが「やきとり大吉」のご主人、伊藤健彦さんなのです。

各避難所を転々とし、たどり着いた高島町武道館で途方に暮れていたころ、明かりが灯る店があり、温かい食事とお酒をいただいたことが親しくなるきっかけでした。町の体育祭に出場させていただけるなどとは思ってもいませんでしたが、「何とかしますから！」の声に励まされ、東京・群馬・福島・宮城など各地で暮らす仲間たちに連絡を取り、11人の仲間が集まりました。

実はこの避難中、チームの仲間を1人亡くし、悲しみのどん底にいたメンバーに希望の光を与えてくれた出来事となり「今しかない！」という思いが余計に強かったと思います。

浪江町で町の大会に毎年出場していたSSBと、小桧山さんの「パイ山社中」との合同チームを結成し、試合に出場することになったものの、球技用具もなく、練習もゼロでした。それでも大会当日は和気あいあい、珍プレー好プレー満載の楽しいひとときを過ごせました。

私たちには「大きな野望」があります。各地に避難している仲間たちの地域でソフトボール大会に参加させていただくことです。そのために仲間には「この現状を理解し、今ある生活を最大限生き抜こう。」と言っています。さまざまな場所での暮らしがあると思いますが、楽しいことを一つでも探して、前へ進むことが僕たちには必要だと思っています。

「こういう支援もあるのだと気づかされました。」と、小桧山司キャプテン

二本松の体育館と裏磐梯、そして今の仮設住宅では、多くの方々から義援金や生活支援物資をたくさんいただき、本当にありがたいことだと思っています。



▲チームを代表してお話しくださった松崎さん（右）、小桧山さん（左）



▲山形県置賜郡高島町第47回総合体育祭・ソフトボール大会の賞状をチームに授与する協会会長 高橋英助さん



▲トロフィーを受け取るチーム代表

『浪江大吉SSB』のメンバーたち

後列右から

伊藤 健彦さん（やきとり大吉）、
松崎 智恵さん（マネージャー）、
木幡 健一さん、熊谷 徹さん、
島田 有紀さん、本田 隼也さん、
小荒井雅治さん

前列右から

平田 邦之さん、枡谷 拓郎さん、
山崎 徹さん、松崎 光平さん、
小松山 司さん



『浪江大吉SSB』メンバーからのコメント（選手は五十音順、カッコ内は現在の居住地）

- 熊谷 徹さん（福島県相馬市）
一日一日を大切に歩んでいきましょう！がんばっぺ浪江町!!
- 小荒井雅治さん（福島県郡山市）
ソフトと避難生活、どちらもホームに帰ることが大事だ。座布団一枚！
- 小松山 司さん（福島県二本松市）
まほろばの スウィングガールズ巡らせて 高島ワイン母を誘ふ
- 木幡 健一さん（福島県南相馬市）
あの苦しいときに出会えた高島の人たちの温もりと、仲間との絆を胸にこれからも頑張っていきたいです。
- 島田 有紀さん（福島県二本松市）
SSBIは、こういうときこそみんなの絆で優勝を目指し新たな未来を作っていきたいです。
- 平田 邦之さん（群馬県館林市）
高島町の皆さま、お世話になりました。頑張っぺSSB 頑張っぺ浪江町 やっちゃうべ×2

- 本田 隼也さん（福島県南相馬市）
浪江SSBの絆は一生の宝物です！
- 枡谷 拓郎さん（福島県南相馬市）
高島最高！SSB最高!!メンバー100人目指して頑張ります。そして株式会社SSB設立！
- 松崎 光平さん（宮城県仙台市）
喜びも悲しみも明日への力に変えて。俺は貴方の分まで笑って生きる！
- 松崎 智恵さん（マネージャー）（宮城県仙台市）
みんなと久々に会えて安心しました。
- 山崎 徹さん（宮城県仙台市）
SSBIは絆の強いチーム。その仲間の一員にいることは誇りです。

仲間や高島町との交流が毎年楽しみに

初めて参加して以来、毎年お誘いを受けて大会を楽しんでいます。平成26年からは大会終了後に芋煮会が行われるようになり、地元チームとより深く交流できるようになりました（松崎さん）。平成28年に介護用品の事業所を立ち上げました。いろいろと大変な中で、毎年恒例の大会が大きな楽しみになっています（小松山さん）。

（平成29年3月2日追加取材）



NAMIE
町民

インタビュー

09

2011年内に「壽」を届けたい

鈴木 大介さん

震災前の居住地：請戸地区

現在住んでいるところ：山形県

取材：浪江町役場 近野／「平成24年4月広報なみえ掲載」

浪江町に180年以上続く造り酒屋である「鈴木酒造店」。酒蔵は津波で流失してしまったが、県の試験場に蔵の酵母が残っていた。その酵母を使い、7月上旬には南会津の蔵を借りて約2,000本の「壽」を出荷する。

その後本格的に製造拠点を探していたところ、山形県長井市に休止している酒蔵があることを知る。最後まで福島県内での再開を模索したが、何としても2011年のうちに浪江の皆さんに「壽」を届けたいとの思いから、その酒蔵を引き継ぐことを決意。12月19日には新たな蔵で仕込んだ「壽」の初出荷を迎えた。

新天地への葛藤

南会津の酒蔵で製造した約2,000本の「壽」は、町民の皆さんにとっても喜んでいただきました。そして、「また壽が飲みたい、造ってほしい」という励ましの言葉をたくさんいただき、本格的な製造を決意しました。

福島県内での再開を目指し、新たな拠点探しを始めましたが、福島県内で新たに酒蔵を建設する場合、建設から製造認可まで1年以上かかることがわかりました。福島県内で再開したいという気持ちの一方で、いち早く町民の皆さんに「壽」を届けたい。なんとか2011年内に新酒を出荷したいという強い思いもありました。

ちょうどそのころ、山形県長井市に昨年まで酒造りをしていて、休止した酒蔵があることを知りました。早速見学に行ったところ、作業動線が考えられてとても使いやすい造りで、しかも最低限の改修ですぐ酒造りを再開できるようになっていました。福島県内での再開は最後まであきらめられませんでした。早く「壽」を届けるため、長井市の酒蔵での再開を決めました。そして、酒造免許の関係から酒蔵を買い取り、「鈴木酒造店長井蔵」と名付けました。

酒造りの再開

新たな酒蔵が決まり、すぐに改修を行いました。まったく土地勘のない地域でしたが、地元の方や以前からお世話になっていた方にご協力いただき、仕込みができるまでになりました。改修に合わせて、震災前から構想していた、通年で仕込み・出荷ができる冷蔵設備も整備しました。

蔵の改修と平行して、11月上旬から弟夫婦とともに仕込みを始めました。仕込みでは山形県の米を使うことになりましたが、今後は浪江の頃と同様に契約農家から仕入れた酒米を使う予定です。また、長井は水が良いので、水の良さが出ていると思います。

この酒蔵では「壽」の他に、地元の方に向けて、元々の酒蔵で造っていた「一生幸福」という銘柄を造っています。地



▲大介さん（前列左）と社長の市夫さん（前列右）弟の莊司さん（後列左から3番目）らと一緒に。

元のお酒を引き継いで造っていくことで、山形県の皆さんにも応援していただきたいと思っています。

浪江町の蔵は津波で流出していて、警戒区域が解除されてもすぐに戻れるかどうかはわかりません。しかし、浪江に戻るために酒造免許は浪江に残したままです。そのためにも、長井市での事業を早く軌道に乗せたいですね。

震災前と同程度まで生産規模が回復

長井市に移って大変だったのが浪江町との気候風土の違い。標高と湿度が高いため、仕込みについては試行錯誤しています。海拔がほぼゼロで沸点が安定し、冬季乾燥という地の利が生かした浪江町の原料処理環境が思い出されますね。周囲の支えもあり、現在では震災前と同じ5万本を超えるところまで生産規模が回復しました。

（平成29年3月2日追加取材）



NAMIE
町民
インタビュー

10

浪江の心や経験を今の生活に 活かしたい・伝えたい

白瀬美智男さん

震災前の居住地：田尻地区

現在住んでいるところ：京都府

取材：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井／「平成24年7月広報なみえ掲載」

白瀬美智男さんは、妻の優子さん、そして息子の清^{きよ}耐さんとともに京都市の借り上げアパートで生活しています。浪江に居たころ、趣味としていたウォーキングや川柳を活かし、現在の土地で前向きに生きようと心がけています。

私たちは震災後、福島市内や娘宅のあるいわき市を移動し、昨年の4月末に府営住宅の空き情報だけを頼りに現在の京都市に移ってきました。文化も風土も異なる初めての土地にきたわけですが、1年以上暮らしているなかで色々な活動にも取り組めるようになりました。1年前の春の桜の花は記憶にないのですが、今年の桜はとても美しく見えました。それだけ、気持ちの整理がついてきたのだなと実感しています。例えば、京都は史跡の豊富なまちということもあり、現在は史跡案内のNPO団体の会員として活動しています。また、なるべく地域の生活に溶け込もうと自治会活動には積極的に参加しています。今日も草刈りの共同作業をしてきました。

ただ、こちらでは土に触ることがないですね。そんなとき、浪江の生活は本当に豊かなものだったことが思い起こされます。何よりも地域の皆さんのつながりが強いところでした。私の暮らした大堀地区や田尻行政区は、子ども会育成会と連携した行事など、昔からの世代と若い世代が一緒になった地域づくりを行っていました。個人的には、野菜づくりや渓流釣り、パークゴルフやウォーキングなどスポーツに興じたり、楽しい毎日でした。

でも、ふり返って悔やんでばかりいても何も前には進みません。なるべく外に出て歩いたり、活動をしたり、情報を発信したり自分なりに努力しています。そしてこうした京都での生活の原点は、浪江での生活の経験がすべて元になっています。私たちは支えられ、助けられることばかりでなく、浪江の心意気を伝えることもできると思います。私も浪江の皆さんが元気にやっているという話を聞くことが何よりも喜びですし、勇気をもらうことができます。

浪江町への帰還については、家族3人で意見が分かれることもあります。福島から遠い京都に暮らしているため、浪江の皆さんの集まりには気軽に行けないときなどは、申し訳ない気持ちになります。

それでも、いまの生活を少しでも活力あるものにするために、前向きに頑張りたいと考えています。「避難」と言いながら、実は私たちの人生にとって大切な時間を費やしているわけですから、少しでもこの時を大切にしたいという思いです。

私たちには浪江町当時に培った豊富な経験と蓄積があるはずで、そして何よりも浪江町民としての心があります。それぞれ皆バラバラではあるけれど、これまでの蓄積を活かし



て、そして健康第一に頑張っていきたいものだと思っています。

京都の仲間と楽しくウォーキング

浪江町ではいろんな趣味に興じていましたが、京都市ではその大部分が難しくなりました。そんな中で唯一楽しめているのがウォーキング。地元の団体にも加入し、週1〜2回ほど楽しんでます。月に1回ほど福島県に戻って冠婚葬祭に参加したり親戚に会ったりしていますが、たまに浪江町の口調に触れると心が安らぎますね。

(平成29年3月3日追加取材)